

## I - 2

## I - 追加発言①

**和薬の生産と流通**

福田眞三（福田眞次商店） ○白井義敏（国産生薬㈱）

和漢薬をとりまく種々の問題の中で、生薬原料に関わる問題は重要な課題であり、そのうちの和薬の生産と流通の現状を報告したい。

漢方の生産高は、1976年の95億円であったものが、1990年には、1657億円への伸びを示している。

これは、医療用エキス製剤の伸張におうところが大きいことは周知の事実であり、これを予想された伸びとするか、予想を超えるものか、あるいは予想以下であったかは、それぞれの見方としても、漢方の将来展望にとって甚だ興味深いものがある。

加えて、期を同じくして、生薬製剤、ドリンク剤、医薬部外品と、健康食品と称する分野にも大きな拡がりを見せ、原料需要が大幅に増加したが定かなデータが見当たらない。

このような環境にあって生薬原料の市場は大きく拡大されたが、その供給ソースの大部分を海外に依存し、和薬の生産と流通への影響はさして大きいものではなかった。

原因としては、急激な需要の拡大に対応できるだけの量的な基盤の不足。ついで経済性に劣ったこと。即ち価格面での輸入原料との隔差が著しかったことがあげられよう。

1977年の生薬原料国内生産量1514ト。栽培面積1693ha。1989年の生産量3469ト。栽培面積3736haを、ほぼ同時期の漢方の生産金額と比較してみると、その寄与の程度がうかがえる。品目については約70程度の維持がされている。

従来より特産品としての実績を持つ、ニンジン、オウレン、トウキ、センキュウ、シャクヤク等の生産地も輸出から内需にと順調に移行をできた産地と、それについての移行に手間取った産地によってその後の推移に大きな隔差をきたしている。

生薬原料は、農産物の中でも投機性の強い作物として、何年かのうちに一年、相場の高い年があれば採算がとれるとさえいわれてきたが、近年の農業事情から単年度の採算が約束されない品目は、営農品目から敬遠される傾向がつよく、言い換えれば農業事情に余裕が無くなってきている。

さらに、国内生産の内容をつめると任意に栽培されていた面積が減少し、買取りの保証されている契約栽培に移行してきている。

引取りだけの保証というあいまいな約束ではなく作付時点で価格の約束された本来の契約栽培が着実に増加してきている。

最近の農業事情の変化は、生薬原料栽培にみえる現象が特別の事情ではなく、高令化、後継者難と、将来についての憂慮からか、急速な変化の進行を感じる。

生産地側の動向に気がかりな材料が見受けられる中で、関係官庁をはじめとして、識者の間で生薬原料供給ソースとしての国内生産への注目がたかまりをみせている。

主務官庁である厚生省においても増大する生薬原料事情をふまえ、数年にわたる作業がすすめられ、国内栽培を対照に「薬用植物栽培・品質評価指針」が近く公布の段階に入っており、又、国会議員100名以上で構成される生薬産業振興議員連盟が、羽田孜現大蔵大臣を座長として熱心な勉強会がもたれており、厚生省、農水省等行政面での実効を上げられるよう協力関係が作り出されている。

農水省においても、(財)日本特殊農産物協会を通じ、過去十年間、継続された薬用作物モデル産地育成事業の中で従来からの生産地の援助と、併せて新しい生産地育成への幅広い努力は現在の生薬原料の国内生産に大きな影響を及ぼしている。

近く、国内生産による経済性を含めた再生産可能なガイドラインの作成も計画され、関係機関等への提言を図りたいとしている。

東洋医学会においては、貴重な種類の保存に永年の努力を傾けられ、その業績は将来への資産として意義の大きいものとなろう。

東京都と、(社)東京生薬協会との連携による栽培試験等、その重要性が認識され、それぞれの努力がなされていることは大きな希望のもてるところである。

具体的な品目としては、オケラ、キツソウ、オウゴン、オウギ、ハンゲ、ジオウ、ダイオウ、ゲンチアナ等々の試作を継続的に行なっている。

このような貴重な基礎作りが無駄になることのないよう、今最も重要なことは需要家側の理解と協力にかかっている。

漢方・生薬製剤等の原料対策の中に国内生産を如何に位置づけるかが重要な鍵となる。

安定した品質と、数量の確保を図るとき、種苗、栽培技術、調整技術等のより確かな基盤を構築して、発展に対応できる原料ソースとし、内側からも、外側からもわかり易い状況にしておくことが迫られている。